

は し が き

21世紀に入り、人や情報の国境を越えた往来が急激に加速しています。このようなグローバル化の進展と共に、多様で複雑で予測困難な変化が地球規模で起きています。また、電子情報の入手・交換は驚くほど簡単になりましたが、溢れる情報と加速的に高度化する情報技術をどうしたらコントロールできるのか、既存の知識から答えは導けません。

今の児童・生徒は10年後、20年後に大人になり、この予測困難な未来に立ち向かうこととなります。コミュニケーション力を伸ばし、文化や言語の違いを超えて誰とでも協働しながらさまざまな課題に取り組むことができる資質を育み、新しい複雑な変化に前向きに対応できる「生きる力」を備えることが期待されるのです。

このような時代を背景に、この度、『新しい英語科授業の実践—グローバル時代の人材育成をめざして』を大幅に改訂しました。本書は、英語科教育関係科目の担当教員や英語科教職課程を履修する学生をはじめ、新任英語教員、小学校「外国語」・「外国語活動」の担当教員を対象としています。2017年告示の学習指導要領に示される新しい教育観の下、コミュニケーション力育成のため英語授業力の向上と強化を図ることに重点を置いて、内容を一新しました。具体的な授業展開や指導の留意点を中心に、英語教育の初心者にも理解しやすい、明解な内容で構成されている点が特徴です。

本書の構成

本書の全体は21章で構成され、序章、第Ⅰ部、第Ⅱ部、第Ⅲ部、そして終章となっています。

第Ⅰ部 実践・展開編（1章～7章）—豊かな授業展開と指導のために—

この「実践・展開編」は、本書の中核を占める内容として、あえて最初に掲げてあります。ここでは授業で実際に使用されている検定教科書や各種の教材を用いた指導例を取り上げています。さまざまな指導技術や教え方の工夫を提示し、さらにその裏付けとなる考え方や理論などを、具体的な授業展開に沿って解説しています。

第Ⅱ部 基礎理論・指標編（8章～13章）—現状の理解と進展のために—

この「基礎理論・指標編」では、授業方法を裏付ける理論や、指導要領に

示されている小学校から高等学校までの外国語（英語）に関する捉え方や枠組みなど、そして指導と評価の関係や観点別評価について論じています。どの学校段階においても教員が理解しておくべき共通事項を解説してあります。第Ⅰ部「実践・展開編」に関連した事項については、相互参照（クロスレファランス）を記して、関連性が把握できるように配慮してあります。

第Ⅲ部 応用・発展編（14章～19章）—よりよい指導と授業改善のために—

「応用・発展編」は、第Ⅰ部と第Ⅱ部で扱った内容に基づき、英語授業に関する個別の事項に関して、さらに発展的に理解が深められるような内容で構成されています。この「応用・発展編」でも、前掲の「実践・展開編」と「基礎理論・指標編」と関連する箇所については随所で相互参照ができるようにしてあります。なお、本書で取り上げていない事項もいくつかあると思われませんが、紙数の都合で割愛せざるを得ませんでした。それらについては、随所に掲載した「コラム」を基に、読者諸氏のご判断で適宜補充していただくことを期待しています。

本書の活用法

英語科教育法の従来類書とは異なり、本書では指導展開や指導方法の工夫について、第Ⅰ部の「実践・展開編」に配置してあります。これは本書の主旨である「授業実践を重視する」という著者の理念を表しています。それ以外にも、読者の皆さんが、それぞれのニーズに応じてどの章から読み始めても、本書のねらいは理解されるという著者の読者諸氏への期待を表明しているものです。本書を英語科教育法のテキストとしてご採択いただく場合は、科目担当教員の授業計画に沿う形で、第Ⅱ部「基礎理論・指標編」や第Ⅲ部「応用・発展編」を優先してご活用いただいても構いません。

2020年1月

石田雅近・小泉仁・古家貴雄・加納幹雄・齋藤嘉則

改訂途中の2019年5月、この本の筆頭著者である石田雅近先生がご逝去なさいました。悲しみと戸惑いの中でしたが、先生のご遺志を引き継ぎ4人で完成に漕ぎ着けることができました。導いてくださった石田雅近先生のご冥福を祈り、感謝と共にこの本を捧げます。

目次

序章 英語教育に求められているもの 1

1. 変化する時代
 - 1.1 「生きる力」の育成をめざして
 - 1.2 思考し判断し表現するための力を
2. 異なる言語と文化をつなぐ国際共通語の重要性
 - 2.1 国境を越える言語
 - 2.2 「複言語主義」の考え方
3. コミュニケーション力の育成をめざして
4. 高い資質と多面的な力量が求められる英語教員

第 I 部 実践・展開編—豊かな授業展開と指導のために—

第 1 章 小学校の授業づくり 8

1. 異文化を乗り越えるための小学校英語教育
2. 日本で小学校から英語を学ぶ意味
 - 2.1 小学校英語導入をめぐる問題
 - 2.2 日本での小学校英語
3. 指導の留意点
 - 3.1 聞くことの指導
 - 3.2 話すこと [やりとり] の指導
 - 3.3 話すこと [発表] の指導
 - 3.4 読むこと、書くことの指導
 - 3.5 文字のある環境づくり
 - 3.6 文法の指導
 - 3.7 異文化に関わる指導
4. 授業の実例「外国語」
 - 4.1 授業の前に
 - 4.2 授業の展開
 - 4.3 留意点
5. その他の指導例
 - 5.1 歌を用いる指導
 - 5.2 チャンツを用いる指導
 - 5.3 ゲームを用いる指導
6. ALT との協働
 - 6.1 役割の分担の確認
 - 6.2 生きたコミュニケーションの発信者になる

6.3 ティーム・ティーチングの効果

7. 文化交流を中心とした活動

7.1 ゲストの出身地の話を聞く

7.2 ゲストと日本文化を楽しむ

7.3 文化交流フェスティバルを開く

第2章 中学校の授業づくり.....34

1. 英語教育における小学校と中学校の連携の意識
2. 中学校の英語授業に関する基本的な考え方
3. 中学校の英語授業をつくる上での手順や授業の基本的構成
4. 思考を伴う英語授業とは何か
5. 思考力を育む英語授業の展開例
6. 授業改善に必要なポイント
7. 高等学校への連携を考える

第3章 高等学校の授業づくり.....49

1) 「英語コミュニケーションⅠ」

1. 「英語コミュニケーション」という科目の意義
 - 1.1 望ましい授業のイメージ
 - 1.2 文法訳読の功罪
2. 教科書本文を用いた「英語コミュニケーションⅠ」の授業
 - 2.1 授業の前に
 - 2.2 単元的设计
 - 2.3 授業の構成
3. 授業の展開
 - 3.1 前回の復習（オーラル・インタラクション）
 - 3.2 新しい内容の導入（オーラル・インタラクション）
 - 3.3 語句や表現の確認
 - 3.4 テキストの読み取りと内容の確認
 - 3.5 解説
 - 3.6 音読練習
 - 3.7 まとめ（サマリーを作る活動）
4. 実践の際の留意点

2) 「論理・表現Ⅰ」

1. 「論理・表現」の目的
2. 授業の基本的特徴、性質について
 - 2.1 知識および技能について
3. 「論理・表現Ⅰ」の授業の構成について

- 3.1 「話すこと [やり取り]」を中心とした活動型
- 3.2 「話すこと [発表]」を中心とした活動型
- 3.3 「書くこと」を中心とした活動型
- 4. 具体的な授業の展開例「論理・表現 I」
 - 4.1 複数の技能に関わる言語活動
 - 4.2 指導手順
- 5. まとめ

第4章 指導の形態71

- 1. 指導形態別の特徴
- 2. 担当教員別の指導形態
 - 2.1 JTE 単独で行う指導
 - 2.2 JTE 単独で行う指導の留意点
 - 2.3 ティーム・ティーチング (TT) の形態

第5章 学習の形態84

- 1. 英語学習に関わる多様な学習形態
- 2. 教室内学習
 - 2.1 全体学習
 - 2.2 個別学習
 - 2.3 ペア学習
 - 2.4 グループ学習
- 3. 教室外学習
 - 3.1 自宅個別学習
 - 3.2 自宅外学習
- 4. 協同学習
- 5. 英語におけるアクティブ・ラーニング

第6章 個別指導の工夫98

- 1. 個別指導の意義・ねらい
- 2. 授業中の個別指導
 - 2.1 意義・ねらい
 - 2.2 授業内の実践例
- 3. 授業外の個別指導
 - 3.1 意義・ねらい
 - 3.2 英語学習のカウンセリング
- 4. 自律的な学習者の育成

第7章 授業指導案の書き方 110

1. 中学校・高等学校外国語科授業の基本的構成について
2. 授業指導案の構成について
3. 授業指導案の作成手順について
4. 小学校英語教育の指導案
 - 4.1 小学校「外国語活動」・「外国語」の学習指導案例
5. 中学校英語教育の指導案
 - 5.1 取り上げる教材名
 - 5.2 指導案（指導過程）
 - 5.3 指導案作成上の注意
6. 高等学校英語教育の指導案
 - 6.1 取り上げる教材名
 - 6.2 指導案（指導過程）
 - 6.3 指導案作成上の注意

第Ⅱ部 基礎理論・指標編—現状の理解と進展のために—

第8章 英語指導法の変遷 132

1. 指導法の変遷
 - 1.1 文法訳読法
 - 1.2 直接教授法
 - 1.3 オーラル・アプローチ
 - 1.4 コミュニカティブ・アプローチ
2. それぞれの教授法
 - 2.1 文法訳読法（Grammar Translation Method）
 - 2.2 ダイレクトメソッド（直接法：Direct Method）
 - 2.3 オーラル・アプローチ（Oral Approach）
 - 2.4 コミュニカティブ・アプローチ（Communicative Approach）
3. まとめ

第9章 英語の習得過程と指導との関係（インプット・アウトプット・インタラクション）..... 143

1. 第二言語習得研究と英語の授業や学習との関係
 - 1.1 第二言語習得研究とは何か
 - 1.2 二つの言語環境
2. 第二言語としての英語習得のメカニズム
3. インプット（どのようなインプットがことばの習得を早めるか）
4. 情意フィルターを下げる試みの重要性
5. 学習者によるインプットの情報処理のメカニズム
6. アウトプット（アウトプットすることはなぜ必要か）

7. インタラクシオンの重要性（言語のインタラクシオンがなぜ必要か）
8. 第二言語習得における教員の役割

第10章 学習指導の出発点・学習指導要領を理解するために…………… 154

1. 学習指導要領とは何か
2. 学習指導要領の変遷—時代が求める教育の理解のために—
3. 新学習指導要領の基本方針策定のための基本認識—中央教育審議会答申—
 - 3.1 子供たちの現状や課題
 - 3.2 子供の未来と教育の内容
 - 3.3 「生きる力」の育成の考え方
 - 3.4 学習指導要領の枠組みの改善の意味するところ
 - 3.5 教育課程は「学びの地図」であるとは
 - 3.6 何ができるようになるか—三つの柱—
 - 3.7 カリキュラム・マネジメントの必要性
 - 3.8 どのように学ぶのか
 - 3.9 何が身に付いたかをどのように評価するか

第11章 学習指導要領が示す英語力…………… 164

1. 新しい学習指導要領に盛り込まれた英語の学力の理解のために
 - 1.1 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方
 - 1.2 小学校から高等学校にいたる外国語科の目標
 - 1.3 「知識及び技能」の習得に関わる目標
 - 1.4 「思考力・判断力・表現力等」の育成に関わる目標
 - 1.5 「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関わる目標
 - 1.6 補足：学習指導要領の英語の目標と学力の関係
2. 小・中・高等学校目標領域と言語活動の例の学校段階別一覧表
 - 2.1 はじめに：「目標」、「言語材料」、「言語活動」を一体的に
 - 2.2 カリキュラム・マネジメントの三つの必要性
 - 2.3 目標領域と言語活動を一体的に

第12章 学習指導要領・小中高の英語指導の一貫性…………… 183

1. 英語科の三つの資質・能力
 - 1.1 三つの資質・能力とは何か
 - 1.2 三つの資質・能力間の関係性
 - 1.3 聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮するとは
2. 英語の授業を内から支える一貫性
 - 2.1 言語の場面や言語の働き・機能
 - 2.2 「英語の授業は英語で行う」の誤解
 - 2.3 補助としての機器利用

3. 英語の授業を外から支える一貫性
 - 3.1 主体的・対話的で深い学びの実現
 - 3.2 カリキュラム・マネジメントと授業
 - 3.3 各学校段階間のつながりの強調
 - 3.4 領域統合型の授業

第13章 指導と評価の一体化 190

1. 学習指導と学習評価
2. 「指導と評価の一体化」の実際
 - 2.1 指導過程の全体像
 - 2.2 PPP の実際
 - 2.3 Presentation-Practice（新出語句）の場面での形成的評価
 - 2.4 Presentation-Practice（新出文構造）の場面での形成的評価
 - 2.5 Production（言語活動）の場面での形成的評価
 - 2.6 グループ活動などでの場面での形成的評価
 - 2.7 時中の「形成的評価」を「観点別学習状況の評価」に生かす手立て
3. 学習評価についての基本的な考え方
 - 3.1 学習評価の留意点
4. 学習評価の主な改善点について
5. 教育課程の編成と年間指導計画の作成
6. 観点別学習状況の評価の実施に向けて
 - 6.1 「知識・技能」について
 - 6.2 「思考・判断・表現」について
 - 6.3 「主体的に学習に取り組む態度」について
7. 観点別学習状況の評価の実際
8. 観点別学習状況の評価と評定への総括
 - 8.1 観点別学習状況の評価—観点ごとの評価—
 - 8.2 評定への総括
9. 定期考査問題の作問に向けて
 - 9.1 「知識・技能」の資質、能力を問う試験問題の作問
 - 9.2 「思考・判断・表現」の資質、能力を問う試験問題の作問
10. 小学校「外国語活動」と「外国語」の評価
 - 10.1 「～するようにする」と「～ができるようにする」の違い
 - 10.2 検定教科書の特徴
11. まとめ

第Ⅲ部 応用・発展編—よりよい指導と授業改善のために—

第 14 章 英語授業を豊かにするために…………… 216

1. 豊かな英語の授業とは何か
2. 教員の英語力
3. 教室内におけるクラスルーム・イングリッシュの意味
4. 英語に関する知識と教養
5. 授業で求められる資質・能力
6. 教員の情報収集の方法
7. ICT やマルチメディアを活用した英語授業

第 15 章 音声と文字の指導…………… 227

1. 音声指導での基本的な視点
 - 1.1 英語の特徴的な発音を押さえること
 - 1.2 まず「意味のある英語」の音に慣れさせること
2. 個々の音の指導
 - 2.1 日本語音との相違
 - 2.2 英語の音声的特徴
3. 単語レベルの読み方の指導
 - 3.1 従来型の指導
 - 3.2 フォニックスによる指導
 - 3.3 フォニックス指導の留意点
 - 3.4 「音素認識」の重要性
 - 3.5 もう一つのフォニックス
4. 句や文の読みの指導
 - 4.1 フレーズ・リーディング (Phrase reading)
 - 4.2 バズ・リーディング (Buzz reading)
 - 4.3 ペア・リーディング (Pair reading)
 - 4.4 バックアップ・リーディング (Back-up reading)
 - 4.5 リード・アンド・ルック・アップ (Read-and-look-up)
 - 4.6 シャドーイング (Shadowing)
5. 表現読みの指導

第 16 章 文法指導…………… 243

1. 文法指導の基本的な視点
 - 1.1 表現のための文法 vs. 理解のための文法
 - 1.2 帰納的文法指導 vs. 演繹的文法指導
2. タスク中心の活動から言語規則の「気付き」へ
 - 2.1 既習事項を踏まえた提示

- 2.2 「気付き」を促す工夫
- 2.3 タスクによる言語活動 (1) 〈自己表現のための文法事項〉
- 2.4 タスクによる言語活動 (2) 〈内容理解のための文法事項〉
- 3. 日本語と英語の構造の違いを意識させる練習
 - 3.1 文構造の違いの理解と練習
 - 3.2 後置修飾に関する変換練習 〈修飾語＋名詞→名詞＋修飾語〉
 - 3.3 言い換えが求められる変換練習 〈僕はウナギだ！〉
- 4. 文法指導の留意点
 - 4.1 生徒の認知レベルには個人差がある
 - 4.2 複雑な説明を要する規則には深入りしない
 - 4.3 単純に見える表現でも明快に説明できるとは限らない
 - 4.4 例外がない文法規則はない

第 17 章 語彙の指導，辞書の指導 257

- 1. 語彙学習の意義・ねらい
- 2. 英語教育における語彙指導の問題点
- 3. 新学習指導要領で求められる語彙の力
 - 3.1 新学習指導要領と語彙の数
 - 3.2 語彙の特徴・受容語彙と発信語彙
 - 3.3 語彙指導の注意点
- 4. 語彙学習の原理
 - 4.1 語彙学習の五段階
 - 4.2 語彙の広さと深さ
 - 4.3 語彙とその記憶の関係
 - 4.4 語彙の記憶と係わり度
- 5. 語彙の学習方法
- 6. 語彙の指導方法
- 7. 辞書指導

第 18 章 授業改善の工夫 270

- 1. 授業診断の項目
 - 1.1 授業に直接的に関わる診断項目
 - 1.2 授業に間接的に関わる診断項目
- 2. 授業診断の方法
 - 2.1 自己診断法
 - 2.2 第三者診断法
- 3. 授業改善のプロセス
 - 3.1 計画・準備
 - 3.2 授業実践

- 3.3 反省・評価
- 3.4 再計画・準備
- 4. 授業前の確認と授業後のリフレクション
 - 4.1 授業前の最終チェック
 - 4.2 授業後に行う診断チェックリストの活用法

第 19 章 英語科教育実習生の心得 283

- 1. 実習の概要
- 2. 実習で学ぶこと
- 3. 事前の心得
- 4. 実習に臨む態度
- 5. 教壇実習以外の学習内容
- 6. 教壇実習
- 7. 研究授業
- 8. 実習終了後にすべきこと
- 9. 関係文書の記載・提出など

終章 成長し続ける英語教員をめざして 294

- 1. 職務遂行のために必要な研修
- 2. これからの教員に求められる資質能力
- 3. 英語教員の研修
- 4. 英語教員特有の資質能力
 - 4.1 英語力
 - 4.2 英語教授力
- 5. 教職ライフステージの成長
- 6. 学び続ける教員であるために

英語教育用語解説 305

引用・参考文献 312

索引 321

著者紹介 328

第1章

小学校の授業づくり

2017年度版の学習指導要領から、小学校から中学校、高等学校へと一貫する英語教育の段階的な到達目標が記述されるようになりました。小学校5・6年生が学んでいた英語に慣れ親しむための「外国語活動」は3・4年生に早期化され、5・6年生は「外国語」という教科として英語を学びます。この章では、小学校英語の特徴と授業の構成、授業の進め方を学びます。

● 本章で学習してもらいたい事柄 ●

- 国際的視点からの小学校英語の意義とは何か
- 小学校英語の構成と中学校や高等学校の英語とは何が違うか
- 小学校での授業実践に必要な視点、言語観とは何か
- 小学校での音声の指導、文字の指導、文法の指導はどうあるべきか

1 異文化を乗り越えるための小学校英語教育

序章で取り上げたように、国際化（globalization）が進んでおり、それに伴い英語教育の早期化が世界規模で進んでいます（Graddol 2006）。諸外国でさまざまな取り組みが行われていますが、特に、近隣のアジア諸国やヨーロッパの国々を見てみましょう。

アジアには、英米の植民地としての歴史を持つインドやパキスタン、シンガポール、香港、フィリピン、マレーシアなど「準英語圏」とみなされる国や地域があり、これらの国や地域では、英語は日常の社会生活に用いられる重要な「第二言語」です。しかし21世紀の初め頃からは、国際化の進展に伴い、台湾、中国、韓国、インドネシア、ベトナム、タイなど、「外国語としての英語」を学んできた国々にも変化が出てきました。小学校教育の中で英語を教科とするところが急速に増えたのです。例えば、韓国では20世紀の終わり頃から教員の研修や教材開発などに莫大な予算を投じ、2001年から全国の小学校の3年生以上に英語を必修教科と

して導入しました。

アジア以外の国々でも同様に英語教育の早期化が進み、21世紀に入ると世界中のほとんどの国で小学校科目として英語を学ばせるようになりました。ヨーロッパでは1993年、国々が一つの共同体となる理想を掲げEUが発足し、以来、関税の自由化、共通通貨ユーロの発行など、政治経済の多くの面で統合を成し遂げました。言語教育についても、相互理解を深め共同体としての絆を強めるためにCEFR (The Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) を始めとするさまざまな施策が打ち出され、成果を上げてきました。EUとしてめざすものは、次の三つです。

- (1) 全加盟国の言語の尊重
- (2) 複言語 (plurilingual) 社会をめざす教育
- (3) 母語と共通語としての英語、近隣諸国の言語の習得

いくつもの言語が存在するEU全体を結束させるためには、自分の地域の言語の他に隣接する国々の言語を学ぶとともに、共通の「作業言語 (working language)」が必要です。英語はフランス語と並び、EUの作業言語としての地位を得ています (吉島他 2004)。国や地域によってまちまちですが、英語を小学校から導入する国・地域は過半数を大きく超えています。

また、世界には、まだ教育やインフラが十分でない国や地域が多くあります。そのような地域に住む人々にとって小学校教育も十分でないケースが多くありますが、その唯一の教育の場で母語以外の言語を学ぶことは、さらに高い教育を受ける機会を得る可能性を広げ、広い世界とつながり、よりよい生活への道を拓くために不可欠なことなのです。

2 日本で小学校から英語を学ぶ意味

日本では、上記のような意識を持って外国語教育や複言語社会を考える機会はまだ少ないかもしれません。しかし、小学校という基礎教育の一部に英語が入るならば、それは、英語は全ての人に必要なものであるということになります。世界のトレンドだからではなく、私たちにとって小学校に英語を導入する意義を認識する必要があります。

まず、序章で論じたように、文化や言語を超えた相互理解や助け合いのための環境づくりが必要になります。思考が柔軟な小学校期だからこ

そ、母語以外の言語教育を通して他者とのコミュニケーションに対する積極性を育成することが重要な目標になります。異質なものを排除するのではなく、違いを乗り越え協力することの大切さを学ぶことが必要なのです。そのために世界共通語の一つとして認識されている英語が選ばれていることを理解したいと思います。

2.1 小学校英語導入をめぐる問題

小学校での外国語学習が、母語が未熟な小学生には有害ではないかという意見も相変わらず聞かれますが、学術的には支持されていません。むしろ、複数の言語によるコミュニケーション能力の育成に相乗的効果が期待できるという考え方があります。理解能力や表現能力の根底には母語にも外国語にも共通する「共通基底言語能力」(Cummins 1984)があり、どちらの言語の学習を通じて、学習者の言語能力を向上させることにつながるという考え方です。

2020年には、小学校5・6年生で教科として「外国語」がスタートしました。自治体によっては英語だけを指導する専科教員を増員する計画を進めているところもありますが、実は、指導の体制づくりや教員養成が追い追いついていないことが指摘されています。児童は、英語に慣れ親しめば親しむほど自分でも英語を使いたくなり、高学年になれば英語の仕組みについても興味を持つものです。小学校教員が英語指導の意義を理解して児童に向き合い熱心に指導を実践すればするほど、自分自身の英語力と英語指導力の限界を感じてしまうことがあるようです。十分な現職教員研修が必要なことは言うまでもありませんが、多忙な教員の働き方の改革と合わせて考えるべき問題です。

小学校英語を指導する教員は、技術的なことばかりでなく、外国語教育についての適切な理解と見識を持っていることが望まれます。学級担任が全ての教科・領域を指導するからこそ、ことばの学習である「外国語活動」、「外国語」においても大きな役割を果たすことができると期待されています。学級担任自身が外国語指導の実践を通じてさまざまなことを発見し、振り返りをし、そして授業の改善を積み重ねることで、小学校英語指導に必要な技術も理念も一層明らかにされますし、現場からのそのようなフィードバックが教員養成・研修にとって大きな意味を持ちます。学級担任と外国語専科教員との役割分担についても、現場の実践を通じてさまざまに検討を加えていく必要があります。

2.2 日本での小学校英語

2017年度版の小学校学習指導要領では、英語教育は、「領域」としての「外国語活動」(3・4年生)と「教科」としての「外国語」(5・6年生)を設定しています。「外国語活動」は教科ではありませんから、小学校学習指導要領の「知識・技能」の項を見ても分かるように、学ぶべき言語材料は指定されていません。学習への評価は文章で記述して残しますが、段階的な評定はせず、「よくできています」、「がんばりましょう」のような成績も付けません。検定教科書はありませんが、文部科学省では指導に用いるための教材を用意しています。

しかし、学習指導要領では小学校3・4年から中学校、高校まで一貫した段階別の目標が設定され、実質的に教科としての「外国語」につながる扱いになっています。例えば、小学校学習指導要領「外国語活動」(中学年)と「外国語」(高学年)、そして中学校学習指導要領「外国語」の「聞くこと」の目標のアを比較してみましょう。次の表のようになっています。

	小学校3・4年生 外国語活動	小学校5・6年生 外国語	中学校 外国語
聞くこと	ア ゆっくりはっきりと話された際に、自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする。	ア ゆっくりはっきりと話されれば、自分のことや身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を聞き取ることができるようにする。	ア はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要な情報を聞き取ることができるようにする。

(文部科学省 2017b, 2017c)

「外国語活動」では「～ようにする」、5・6年生では「～ことができるようにする」と、書き方を区別していますが、学年が上がるにつれて目標が高められていることが分かります。他の項目についても比較してみると、同様の構成になっています (p.169 参照)。

この位置付けには、「外国語活動」では伸び伸びと活動させる中で、外国語でのコミュニケーションを楽しむ姿勢や、ことばが通じない相手とのコミュニケーションを取るために必要な忍耐力や寛容さを養い、それが後の外国語学習の「素地」になるという考え方が現れていると考えられます。

3 指導の留意点

この項では、「外国語活動」と「外国語」に関する個々の技能の指導について考察しましょう。

3.1 聞くことの指導

英語の音声についての指導は、日本語とは異なる英語の音声を身体的に経験し感覚として身に付けるための基本中の基本です。中学校以降の段階でも重要なことですが、小学校で最初に与えられるべき指導であり、児童の発達段階に相応しい活動を構築できる場面でもあります。ポイントは次の五つです。

(1) 英語のリズムに慣れる

個々の音を正しく発音することよりも、英語らしいリズムを覚えることから入りましょう。「とらいあんぐる」は日本語では7文字で、音節も七つありますが、英語では *tri-an-gle* と3音節です。この違いを体験させるためには、チャンツや歌などが利用できます。児童と一緒に歌ったり踊ったりすることは、教員にとっても良い練習になるでしょう。

(2) 英語の句はカタマリ（チャンク）で慣れる

中学年の「外国語活動」では、1語でも英語が口から出せたら素晴らしいということになりますが、児童はすぐに句や文のレベルの英語に遭遇することになります。*Thank you.* や *Good morning.* はそれらのうちの簡単なものですが、*Come to the blackboard.* や *Make groups of two.* のような教室英語を頻繁に聞かせることによって、生徒は個々の語の意味を考えるのではなく、先生の指示を「音のカタマリ」として捉え、意図を理解し従います。そのようにして日常で使われる中で、時には *Come to the blackboard.* が *Come to the door.* になったり、*Come to the window.* になったりするのを聞くうちに、児童は *to the ...* の意味をおぼろげに理解するようになります。その段階でも *to the ...* を1語だと思ふ児童がいるでしょう。中学校で前置詞の概念を学んだときに、小学校での *Come to the window.* が記憶に蘇ればよいのです。同様に、*I like ...* や *I am ...* のような自己表現によく用いられる表現も、カタマリとして児童に定着させることで十分だと考えます。

(3) 概要を理解することに慣れる

中学年では1文を聞いて理解できることが目標ですが、高学年ではあ

る程度まとまった量の文を聞いて理解させます。例えば、物語などを聞くことを指導します。一字一句を確認しながら理解させるのではなく、大まかな話題の流れ、事実関係や登場人物などを押さえることができるかどうかポイントです。

(4) ビジュアル情報を添える

絵や写真、ビデオなどが添えられると、聞こえて来る音声と視覚情報が結び付き、内容が児童に届きやすくなります。文部科学省作成の *Let's Try!* のビジュアルも、十分に活用したいと思います。

(5) 反応 (response) することを習慣付ける

児童には、聞いて理解した瞬間に声や表情やジェスチャーで示すよう習慣付けをしましょう。Great! や Wow! や Really? などの相づちを教えましょう。日常的に教員が response のモデルになることが大切です。ネイティブ・スピーカーの ALT (Assistant Language Teacher) の真似をさせることも効果的です。言語活動の中で児童自身が話す側になり、相手の明確な反応が返ってくるのが嬉しいと実感できるような体験をさせることが効果的です。

3.2 話すこと [やりとり] の指導

● コミュニケーションの往復に慣れる

コミュニケーションとは、情報を自分から相手に伝えるだけでなく、情報を受け止め、また相手に投げ返すキャッチボールのような双方向の営みです。小学生に英語教育を行うことの意味の一つに、この双方向であるコミュニケーションを積極的に行う態度を育てることがあります。挨拶のような型にはまったやりとりは、その最も基本的なものです。教員がしっかり感情を込めて生き生きと表現することが、生徒の良好な反応を引き出し、それが話すことへの積極的な姿勢へとつながります。ポイントは次のとおりです。

● 「聞くこと」への response の延長として「やり取り」があること

特に、たくさんの英語表現を学んだ高学年の児童に、response の後に 1 文を付け加えてみるような軽い負荷をかけた活動をさせましょう。その準備として、次のような手順でやり取りの内容を深めます。

① 教員から発問し、答えるかたちで練習する

T (Teacher): I want some chocolate. What do you want?

S (Student): I want chocolate.

②反応した後に、相手の言ったことを繰り返すようにさせる

S₁: I don't like apples.

S₂: Oh, you don't like apples.

③反応した後に、一文を付け足すようにさせる

S₁: I don't like apples.

S₂: Oh, no. I like apples.

また、I like fruit. や I am happy. というような簡単な自己表現を使う機会を児童に多く与えましょう。教員はその際にも、Wow, that's great! や Me, too. のような、積極的評価を示すコメントを返す習慣を持つべきですし、生徒同士でもそのように反応することの大切さを指導していくべきです。

3.3 話すこと [発表] の指導

「発表」には「やり取り」とは異なる点があり、注意が必要です。ポイントとしては次のようなものが挙げられます。

(1) 複数の相手を前にして話すこと

クラス全員の前で発表する、児童にとっては緊張する場面です。その一方で、準備をして臨むことのできる言語活動です。教員としては、グループでの準備などを通して、日頃慣れ親しんだ文や表現が使えることに気付かせることが大切です。

(2) 複数の文を発話すること

母語でない英語では、言おうと思っても、複数の文を口から滑らかに出すのは容易ではありません。たくさん聞いて理解し、自信を持って言えるものを使わせることが必要です。

「発表」についての学習指導要領の記述と解説は第10章と第11章に詳しく書いていますが、以下に言語活動を行わせる上でのポイントを紹介します。

【外国語活動】

- 身の周りのものの色や形、数などについて人前で話す

This is my dog. It's black.

- 好き嫌い、欲しいものについて人前で話す

This is my pencil case. I want a new pencil case.

- 時刻や曜日、場所など日常生活に関することについて人前で話す

It is Monday today. It's rainy.

この活動では、実物やイラスト、写真などを見せながら話すようにさせます。それらが手元にあって児童は安心して発話するきっかけが得られます。3・4年生は、1文での発表から始めてみましょう。

【外国語科】

- 時刻や日時、場所など日常生活に関することについて話す

It is 12 o'clock. I am hungry. I want to eat lunch.

- 自分の趣味や得意なことなどを含む自己紹介をする

My name is Saito Yui. I like swimming. I want to go to the sea.

- 学校生活や地域のこについて、自分の考えや気持ちなどを話す

We have the summer festival this Saturday. But I don't like Bon dance. I want to dance Yosakoi-soran.

「人前」での発表は、児童にとって抵抗感があるものです。まして、たった今、チャンツで練習したばかりの新しい表現を使わせることは無理なのです。普段の「やり取り」の中で十分にインプットをしておくことが基礎になります。そして、グループでの準備や、グループごとの共同発表を取り入れるのも、児童の抵抗感を減らすことに役立ちます。

3.4 読むこと、書くことの指導

小学校学習指導要領では、中学年では、文字は「児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして取り扱うこと」とされています。しかし、3年生の国語ではローマ字を指導しますし、児童の身の周りにはアルファベットが溢れています。英語を読むことや書くことへの興味も高まってきます。英語とローマ字綴りのずれに気付き、関心を示すことは自然なことです。ローマ字は日本語を表すための手段として学びますが、ローマ字を学べば英語が読めるようになると誤解する児童も多くいます。学習指導要領上は、「外国語活動」では「読むこと」と「書くこと」の指導は設定されていませんが、ローマ字の指導とアルファベットの指導はあまり間をあけないほうが良いと思います。指導に当たっては、次の11のポイントを確認してください。

- (1) ローマ字のルールでは、英語を読んだり書いたりできないことが多いことを確認する

- (2) ローマ字学習で使わない文字 (C, F, J, L, Q, V, X) を丁寧¹⁾に扱う
- (3) 文字の名前¹⁾の指導では、その文字で始まる語の絵や写真を添える
- (4) 語や句、文を読むことと書くことは、高学年で扱う
- (5) 中学年でも、授業で使う絵カードに綴りを添えてよいが、綴りを読み上げたり書いたりまではさせない
- (6) 児童の名札はヘボン式ローマ字で用意する
- (7) 教室の文字掲示は、授業での指導内容と連携させ計画的に貼り替えを行う
- (8) 高学年の英語を読む指導では、意味が分かり慣れ親しんだ語句を拾い読みすることから始める
- (9) 高学年の英語を書く指導では、意味が分かり慣れ親しんだ語句を書き写すことから始める
- (10) 文を書かせる指導では、thank-you card, birthday card, 自己紹介カード、教室掲示物など、書く目的を意識させて書かせる
- (11) 見本を示して、または複数の見本から選択させて書き写させる

3.5 文字のある環境づくり

例えば、小学校によっては「英語ルーム」などと名付けた特別な教室を設置していますが、そこには海外の観光ポスターや写真などが掲示されていることがよくあります。これらの掲示物は、異文化理解以外にも、英語を読むことと書くことについても効果が期待できます。France, China, Canada, London, New York など、児童が知っている簡単な国名や地名が入ったポスターを用意するとよいでしょう。全て大文字で構いません。それぞれの国や地域の特徴的な写真が効果的です。第一歩として、ポスターの地名などに関心を持たせることから始めます。児童が外来語としての地名などを口にしたら、英語らしい音声を聞かせましょう。また、ALT の出身地を取り上げることもできます。ALT に写真を提供してもらいましょう。出身国の地図や国旗、お国自慢や名物料理などの写真ばかりでなく、ALT 個人の家族や家、町の写真も具体的な異文化をイメージする助けになり、効果的な掲示物になります。そこに添える説明の語や句を児童に書かせるなら、単なる書き写しの練習以上のものになります。

教室や校内といった児童の「環境」に文字を用意することには大きな

注

1) 例えば、B という文字の名前は /bi/ であり、表す音素は /b/ である。

意味があります。中学年でも教室の掲示にはアルファベットを含むものがあって構いません。児童の中には綴りについて質問する子、まねして書きたがる子や、綴りを覚えたがる子が自然に出てくることでしょう。教員は、最初から読み書きの一斉指導を考えるのではなく、児童の文字への関心の高まりを待てばよいのです。

高学年で文字を扱うに当たっても同様で、授業で用いて、聞いて理解でき発音できる語や句を、絵を添えて教室に掲示し、常に子供たちの目に触れるようにすることで、絵の示す「概念」と語の持つ「音声イメージ」が結びつきます。そこに単語の「視覚的イメージ」が添えられ、記憶に残るのです。

さらに教員は、フォニックスについて多少の知識を持っているとよいでしょう。教室に掲示する英語カードを、ある時期意図的に一つの音にこだわって掲示することが効果的です。例えば、bで始まる bear, box, bat, bread などの語だけを掲示したり、cat, bat, hat のように at で終わる語だけを掲示するなどのさりげない工夫が、長い目でみると効果があるものです。

ネイティブ・スピーカーの ALT が来る日には、英語の名札は必須です。ローマ字を学んだ4年生以上の児童は自分で書けるかもしれませんが、ヘボン式ローマ字で書く良い機会です。好きな字体と色でデザインさせましょう。

3.6 文法の指導

上で述べたように、言語の使用場面と内容を明確にして、音のかたまり (chunk) として語句や表現を指導することから始まる小学校英語ですが、小学校の高学年にもなれば、自然と文を構成する要素についての規則に関心を持つものです。文法意識が芽生えることは、具体的操作期を過ぎようとするこの時期の児童には自然なことであり、国語教育でも、そのような規則性への「気付き」を伸ばすことに焦点を当てます。

英語にあって日本語にない規則性、例えば、単数・複数の区別、人称代名詞の性別などは、日常の言語活動の中で多くの例に触れているうちに気が付くかもしれません。それでも、例えば、教員が I like my cat. I like her very much. と言えば、多くの児童は her について関心を持たないまま「先生は自分の家のネコが好きなんだ」と了解するでしょう。まずはそれだけでもよいのです。

もちろん her という語に気付く児童もいるでしょう。しかし、ここで

従来の中学校からの文法指導のように、品詞を覚え、規則を覚えることを要求する必要はありません。授業で耳にする英語の文から規則性を発見した児童には、「よく気が付いたね」と誉めることがまず大切です。中学校へ入ったら詳しく学ぶことができるのだと伝えてあげてください。

また、語順についての気付きを促すことが必要です。「I want や I like の後に来る語句が目的語だ」と文法用語を用いて教えるのではなく、活動をくり返す中で児童自身が規則性を発見することを待つのです。例えば、want や like の後に来る語句はいろいろ変えることが可能なのだと気付いたときには、「そうだね。日本語と違うね」と確認してやるだけでよいのです。学習指導要領では、語順を意識して書き写すことを目標にしていますので、書くことの指導では文の一部を書き写させることにも意味があるのです。

高学年では、基本的な過去形も指導することになっています。これも、「過去形はこうして作る」という指導ではなく、カレンダーの日にちを指さしながら昨日のことを話題にしたり、9月の新学期に夏休みの体験を話題にしたりなど、自然な場面を用意して活動させることが大切です。

3.7 異文化に関わる指導

海外の文化に触れる方法は、図書、テレビの教育番組放送、教科書準拠のDVDなど、さまざまなものがあります。また、観光ポスター、写真などを教室に掲示することも、文字指導と関連付けて効果的です。文字指導の項で述べた、ALT 個人の故郷に関するものも、具体的な異文化をイメージする助けになり効果的です。

4 授業の実例「外国語」

この項では、2020年度から使用される検定教科書を例にとり、1回分の授業の展開の方法を論じます。使用する教科書は *Here We Go! 5* (光村図書 2020) です。なお、中学年の「外国語活動」の展開例については、第7章「授業指導案の書き方」を参照してください。

4.1 授業の前に

まず、授業の目標と単元計画に目を通し、授業の前までに児童がどの程度英語に慣れ親しんでいるのか、単元の後にはどのような力が付くことを目標にしているのかなどについて、そして、すでにどのような語句

や表現を学習しているのかを確認しましょう。

既習の表現のうち基本的によく使われるものは、毎回の授業で、例えば、small talk の場面などで教員が繰り返し意識的に使うとよいでしょう。

この単元の目標は次のとおりです。

- 場所を尋ねたり，道案内をしたりする場面で受け答えができる
- 地域や町の施設などを表す語句を理解し使うことができる
- 指示文を理解し，使うことができる
- 基本的な前置詞の働きを理解することができる

また，この単元で指導する表現は次のとおりです。

- 場所を尋ねる Where is ... ?
- 場所を伝える It's in / on / under / by
- 行程を指示する Go straight for ... block(s).
- 方向を指示する Turn right /left.
- 挨拶する，お礼を言ったりお礼に応えたりする（既習事項）

以下は，単元計画の概略です。7回の授業として計画してあります。

回	ページ	タイトル	目標	育成すべき資質・能力
1	pp. 96-7	Hop	店や施設，道案内の言い方を知ろう	知識・技能
2 3	pp. 98-9	Step 1	ものがどこにあるのかを尋ね合おう	知識・技能 思考・判断・表現等
4 5	pp. 100-1	Step 2	道を尋ねたり，答えたりしよう	思考・判断・表現等
6 7	pp. 102-3	Jump!	自分たちが考えた町の道案内をしよう	思考・判断・表現等 学びに向かう力・人間性等

教科書以外に用意するものとしては，教科書巻末付録の絵カード（町の中にある公共の施設）と，動画や音声資料を再生する環境（パソコン，ディスプレイなど）です。²⁾動画や音声資料は，指導用のデジタル教材を使えると便利ですが，教科書の各ページにあるQRコードからインターネット経由で参照できるものもあります。あるいは指導書に同封されて

注

2) 動画や音声資料の提供については，教科書出版社により方式が異なる。

いる場合もあります。

パソコンが利用できない場合でも、動画のストーリーに沿った一連の絵カードがあれば、紙芝居のように用いて場面を提示できますが、音声資料を再生するための機器は必要です。

4.2 授業の展開

この授業は、単元の2回目です。特に場所を表す表現を扱います。

①挨拶（4分）

ときおり見かけることですが、挨拶の際に、大袈裟な腕の振りを付けて“*How are you?*”と一斉に言わせることを実践している教員がいます。気持ちのこもった自然なジェスチャーではありません。低学年ならともかく、単なる「儀式」の型のようになっていることは良いことではありません。また、ALTの中には、“*I’m fine, thank you. And you?*”という応答があまりに機械的であることを嫌い、児童に“*I’m hungry.*”や“*I’m sleepy.*”と応えさせている場面もよく見かけます。もちろん、児童の健康状態や気分などを表現させることには意味がありますが、それを挨拶と混同しないことが大切です。高学年の児童には、挨拶というものの意味を考えさせたいものです。

また、教員やALTから先に“*How are you, class?*”と問うよりも、児童から先に“*How are you, Saito-sensei?*” “*How are you, Rob-sensei?*”³⁾と挨拶する習慣を付けましょう。教室でのやり取りは受動的になりがちですので、こういった機会を自主的に発言する習慣につなげましょう。挨拶の際に名前を呼ぶことも、英語話者の文化的な習慣として理解させ、身に付けさせたいことです。

②Small Talk（6分）

身の周りのことを話題に取り上げます。学級担任とALTがまずやり取りをし、さらに児童も交えてやり取りをします。5年生の学年の後半になってくると使える表現が増えてきますので、児童同士でのやり取りの場を少しずつ増やしていくことも必要です。

注

3) ALTの多くはfirst nameで呼ばれることを好むが、先生を呼び捨てにすることに馴染めない学校では、妥協案としてこのように呼ぶことがよくある。

HRT: Rob, what's your favorite color?

ALT: Look at this. 〈自分の T シャツを指さす〉

HRT: It's a black T-shirt.

ALT: Yes, I like black. You know, I'm from New Zealand.

HRT: Oh, do New Zealanders like black?

ALT: Of course! You know All Blacks, our national rugby team. 〈児童を見渡して〉 What's your favorite color? Black? Do you like rugby?

HRT: 〈黒いシャツの児童に〉 Do you like black?

S₁: Yes. I like rugby.

HRT: All right, class. Ask your partner: "What's your favorite color?" 着ているものの色を話題にしてごらん。

..... 中略

Small talk は以前に学んだ表現などを動員して、日常の話題でやり取りを楽しく体験する場です。新しい言語材料の導入を small talk に含める考え方もありますが、導入は導入、別のこととして考えるのが望ましいのです。前回の授業で扱った言語材料は含めても構いませんが、しっかり復習する必要がある事柄は、そのための時間を取り分けて扱うべきです。

③復習（語彙）（10分）

1 回目の授業では、動画で、公園にいた主人公たちが車椅子の青年と出会い、道案内をする場面を視聴しています。その中で青年の帽子が風に飛ばされる場面があり、また、公共施設の名前も導入されています。その動画を前提として、絵カードを用いて、町の施設の呼び名を復習します。前回の授業でゲームなどを行って学んだ語彙です。今回も、復習として、もう一度ミッシングゲーム (missing game)⁴⁾ を行うのもよいでしょう。さらに、復習の締めくくりとして、無言で絵を見せます。児童は考え、判断をして発音することになります。もちろん、うろ覚えのもの、発音の曖昧なものはしっかりリピートさせます。Library のように L と R の違いがポイントになるものは、ALT にしっかり指導してもらいます。発音の指導は、児童が思考しながら発話する場面よりも、語彙の復習のよ

注

4) ミッシングゲームとは、教員が黒板に貼った何枚もの絵カードのうちからいくつかを隠し、児童に当てさせるゲーム。語彙の記憶を増強する効果がある。

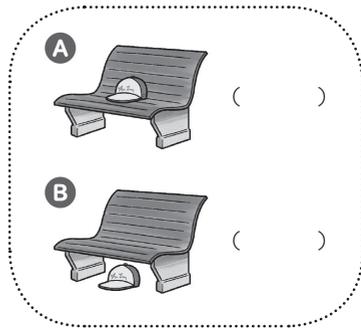
うな場面でこそ丁寧に言う意味があります。

④Let's Watch. (動画を用いて) (5分)

ここは前置詞に着目させるための活動です。まず、どのような場面だったかを確認するため、前回の授業で視聴したストーリーの動画の一部を見せます。次に、教科書の挿絵と指示文を全員に確認させ、「帽子の場所を英語でどう言うか、よく注意して聞くように」と指示をしてから、このページ用の短い動画を見せます。帽子の場所を尋ねる1往復の対話だけが流れますので、帽子の位置を表す正しい絵を選ばせます。

A: Oh, no. Where is my cap?

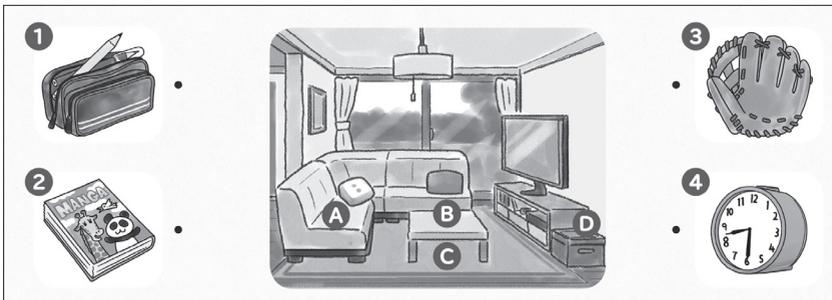
B: Oh, it's on the bench.



これはほとんどの児童が正解すると思います。ALTに正解を確認してもらい、児童はリピート練習をします。

⑤Let's Listen. (教科書の挿絵と付属音声を用いて) (10分)

場面を与え、聞くことの力を付けるための活動です。居間で探し物をしているという想定です。五つのものについて質問と回答を聞き、図の①～④の絵とA～Eの場所を線で結びます。これも、音声を聞かせる前に、絵にある家具や品物について英語で何と言うのかをひとつずつ確認しておく必要があります。



- (1) A: Tina, where is my pencil case?
 B: Your pencil case?
 A: Yes.
 B: Oh, your pencil case is on the sofa.
 A: Oh, yes. It's on the sofa. Thanks.
- (2) A: Tina, where is my book?
 B: What book?
 A: My favorite manga.
 B: Oh, it's under the table.
 A: Really? Oh, yes. It's under the table. Thanks.
- (3) A: Tina, where is my baseball glove?
 B: Your baseball glove is in the box.
 A: In the box? Where is the box?
 B: It's by the TV.
 A: By the TV? Oh, yes. It's in the box. Thanks.
- (4) A: Tina, what time is it?
 B: Look at the clock.
 A: Where is the clock?
 B: It's on the table.
 A: Oh, yes. It's on the table. Wow, it's 8:30. I'm late.

この活動も、正解を確認した後は、ALT と一緒に “Where is the clock?” “It's on the ...” というように対話の形で発話練習をしておくことです。

⑥Let's Chant. “Where is my cup?” (5分)

この単元のターゲットとなる表現の口慣らしです。Cup だけでなく box, pencil, book, bag, chair, ruler, desk, cap, head が出て来ます。このチャンツは掛け合いになっており、話に「落ち」がありますので、ジェスチャーを付けると一層、楽しく練習することができます。このチャンツは、単元の 1 回目から毎回の授業で使うようにすると、児童の発音やイントネーションの向上に効果があります。

Where's my cup?	It's in the box.
Oh, yes.	
Where's my pencil?	It's on the book.
Oh, yes.	
Where's my bag?	It's by the chair.
Oh, yes.	
Where's my ruler?	It's under the desk.
Oh, yes.	
Where's my cap?	It's on your head.
You're right!	

Where と is の間を切らずに「ウェアリーズ」のようにつなげて発音するようにします。また、cap は「キャッ p」ではなく「ケアー p」と発音すると英語らしくなります。

⑦まとめ・ふり返し (5分)

振り返りカードに記入させます。教員は簡単な英語で、児童の英語使用の状況と参加態度を評価します。さらに、「場所を言えるようになったら、次回はよいよ道案内ができるようになるよ」と告げて、次回から先の単元目標を児童に意識させます。

4.3 留意点

この授業案は、教科書の流れをきちんと追う形で書かれています。特に、今回のように、場所を表す表現が多く出てくる場合、次回の授業での復習は、教科書に拘らず、教室の中のいろいろなものを話題に挙げて場所を表す言い方に慣れる必要があります。実生活とつながるような練習をどれくらいするかにより、児童が思考し、判断し、発表をする力が厚みを増します。また、思考し判断しながら練習をすることによって、知識と技能も厚みを増すのです。知識・技能をしっかりと仕上げから思考・判断・表現へと進むのではなく、実際の場面に使える実感を与えながら、

双方を行ったり来たりして力を養うことが必要です。

次回以降の授業では、児童が身に付けた英語を使いたくなるような場面を提供することにより、深い学びへと向かうことができるように促すこととなります。今回の授業では、表現の型をしっかりと入れることに重点が置かれましたので、発音などの正確性を意識した指導としました。児童が自主的に発話する場面では、彼らの積極的な思考と判断を優先するため、正確性に関わる指摘は控えることが多くなるはずだからです。

5 その他の指導例

高学年では、検定教科書を用いる指導が中心になると思われませんが、他の教科の指導と同様、さまざまな素材を追加して活動を行うことが可能です。教科書以外の教材を利用することで、児童の知識・技能を一層高め、思考・判断・表現を育てる機会を増やしたり、教科書の内容からさらに発展した深い学びへとつながる学習に児童を導いたりすることが可能です。

5.1 歌を用いる指導

小学校の外国語活動に限らず、中学校や高校の授業でも同様に、歌やチャンツは極めて効果的です。歌は授業のウォームアップにも、また授業の締めくくりにも用いることができます。次のような利点があります。

- (1) 歌うことは楽しく、英語学習の動機付けとなる
- (2) 気分をリラックスさせる
- (3) 英語の音（短音、音連続）になじませる
- (4) 英語のストレス、リズムを体で覚えさせる
- (5) よく使われるフレーズはチャンク (chunk) として耳になじませる
- (6) 右脳を活性化させる

指導例 “Head, Shoulders, Knees and Toes”

ALTはこの遊技をよく用います。低学年向きの歌としてあまりにありふれた歌であり、高学年の児童の評価は必ずしも高くないようです。しかし、この歌には同じフレーズの繰り返しがあります。また、and 以外は名詞しか使われていません。他にも「英語で英語を指導する」基本が詰まっています。

Head, shoulders, knees and toes, knees and toes.
Head, shoulders, knees and toes, knees and toes.
Eyes and ears, and mouth and nose.
Head, shoulders, knees and toes, knees and toes.

多くの児童が「ニーザントー」とは足のことを指す1語だと誤解するかもしれません。しかし、指導の順序に注意するなら、訳の分からない呪文のようなことばも、意味が見えるようになります。次の手順で指導します。

- ① 授業者は生徒の前に立ち、自分の頭に手を乗せ“**My head!**”と言い、児童にリピートさせる。
- ② 同様に、授業者は順に“**Shoulders!**”, “**Knees!**”, “**Toes!**”の順に体の各部分の語をゆっくり確認し、児童にリピートさせる。
- ③ 各語が指す部分を実際に見せる。knees や toes は足を上げて示す。
- ④ 児童を立てせ“**Touch your head.**”, “**Touch your shoulders.**”, “**Touch your knees.**”, “**Touch your toes.**”など、TPRを用いて指導する。
- ⑤ 授業者は黙ったまま、自分の頭、肩、膝、つま先に順に触れる。児童が黙っていたら、「何だっけ?」とか“**Say it.**”（言ってみて）のような声かけをして、“**Head, shoulders, knees, toes**”と言わせるようにする。
- ⑥ 触れる箇所の順序を変えてみる。
- ⑦ CDの伴奏をかけ、指導者を見ながら全員で歌って動く。

Eyes, ears, mouth, nose も歌詞には出てきますが、それらの語は次に丁寧に扱い、初回ではそのまま踊らせて構いません。一回に導入する語数をあまり多くしないためです。そのまま歌いながら使えば、児童は適当にまねようとするでしょう。勘を働かせるよう仕向けることも大切です。

小学校で用いる英語の歌は、同じフレーズが繰り返されることと、具体的な意味を持ち理解しやすいことが、大切な要素です。日常的な挨拶が繰り返し入った歌や、数だけが徐々に増えていく数え歌などが適しています。

次は有名な数え歌です。かつては **Indians** が使われた歌でしたが、最近では政治的配慮から、別の語に置き換えられています。振り付けは簡単で、

指で数を示して歌います。pumpkins のところで両腕を丸く広げ、しゃがみます。

One little, two little, three little pumpkins,
Four little, five little, six little pumpkins,
Seven little, eight little, nine little pumpkins,
Ten little pumpkins in the pumpkin patch.

Ten little, nine little, eight little pumpkins,
Seven little, six little, five little pumpkins,
Four little, three little, two little pumpkins,
One little pumpkin in the pumpkin patch

4行目と8行目の in the pumpkin patch は、日本で知られている曲には合わせにくいので、in the patch と短くしても構いません。この歌はハロウィーンの時期に相応しいのですが、季節と関係なく、ゲームの後など児童の興奮を鎮めるのにも便利です。後半の数が減るところで、指導者が声を徐々に小さくしていくと、児童も真似をして声を落とし、雰囲気穏やかになります。

5.2 チャンツを用いる指導

チャンツとは、皆で声を揃えてことばを繰り返すことです。ジャズ・チャンツは、英語教育の目的のためにキャロリン・グレアム（Carolyn Graham）が開発したものが最初です。4ビートのジャズのリズムに乗せ英語のフレーズの繰り返しを楽しみます。授業のウォームアップなどに適しています。中には、教員と児童または児童同士の掛け合いになっているものがあります。

チャンツを用いる際は、次の点に留意しましょう。

- 児童を立たせ、リズムに合わせて体を自然に動かすように促す
- 手拍子を入れるなら「後打ち」で
- CD、または、電子キーボードの自動リズムを用いる
- 初めてのチャンツは1行ずつ練習するが、スピードを落としたりリズムを崩したりしない
- 難しい表現が含まれることがあるので、レベルに配慮する

次の例では、医師役を教員、患者役を児童がします。もちろん、児童を2組に分けてもいいでしょう。痛む部位を押さえることも忘れずに行わせましょう。

Doctor, Doctor!	by Richard Graham
Doctor, Doctor! My head hurts.	
Doctor, Doctor! My arm hurts.	
Doctor, Doctor! My leg hurts.	
Doctor, Doctor! My stomach hurts.	
	Are you OK?
No, I'm not!	
	Are you OK?
Yeah, I'm OK!	
Doctor, Doctor! My hand hurts.	
Doctor, Doctor! My foot hurts.	
Doctor, Doctor! My back hurts.	
Doctor, Doctor! My tooth hurts.	
	Are you OK?
No, I'm not!	
	Are you OK?
Yeah, I'm OK!	

(Graham 2019)

/k/は「破裂音」ですが、My back hurts!のbackの/k/は呼気を伴わずに次のhurtsへと続きます。Doctorは「ド・ク・タ」でなく、doc・torと2拍の語です。教員も児童と一緒にリズムに乗せて繰り返すうちに、自然と慣れてきます。コツは、文字を目で追わずに音だけをまねることです。

5.3 ゲームを用いる指導

ゲームにもさまざまなものがあります。④ (p.20)で話題にしたミッシングゲームや、伝言ゲームもよく使われます。いずれも競争の要素を入れることで児童の興味を高め活動に集中させます。ただし、それぞれの言語表現への慣れ親しみや、学んだことを楽しく使って試してみると

いった、指導の目的を持ったものでなくてはなりません。例えば、次のような例が考えられます。

- 決まった表現を使わせることが目的のもの
(カード集め、伝言ゲーム、インタビューなど)
- 教員やクラスメートの英語を聞き、身体で反応をすることが目的のもの
(カルタ取り、フルーツバスケット、ジェスチャーなど)
- 相手の英語を聞き、ことばで反応することが目的のもの
(カード集め〈上記〉、クイズなど)

楽しいだけでなく、英語を聞かせたり言わせたりする工夫が必要です。

TPRでの指導を例に取りましょう。授業のウォームアップとして、教員からクラスに、また、一人の児童からクラスに、グループからグループに出題することができます。初めは、“Run!”や“Ride a bicycle!”や“Sleep!”のような簡単な命令文を与えます。徐々に“Eat ramen!”“Sing to karaoke!”“Walk like a *ninja*!”“Be a happy monkey!”など、楽しいものを工夫しましょう。

伝言ゲームにジェスチャーを取り入れることも可能です。インターネットにもさまざまなゲームが掲載されていますので、参考になります。

6 ALTとの協働

自治体によってALTの配置の方法はかなり違いがあります。各校ごとにALTが常駐し、毎回の授業だけでなく日常的に児童と触れあえるようにしている自治体もあれば、ALTの訪問授業は週1回で、それ以外は学級担任が単独で授業するようになっている自治体もあります。また学校や学年によっても差があります。本来、ティーム・ティーチングでは、学級担任とALTが十分に相談でき、柔軟に授業運営を行うことが理想ですが、打ち合わせの時間が十分に取れないことがしばしば指摘されます。結果的に、ALTが単独で授業を進めてしまい、学級担任が児童の管理以外に役割を見いだせず苦勞していたり、ALTがCD音源の代用のような役割しかしていなかったりというケースもよくあるようです。

6.1 役割の分担の確認

学級担任が指導計画に沿って授業を進めている間、ALTは何もするこ

とがなく、逆に ALT が児童と練習をしている間、担任は見ているだけということがよくあります。これではティーム・ティーチング (Team Teaching) の効果が十分にある授業にはなりにくいのです。次のようなことに留意するとよいでしょう。

- 対話の相手として

授業の場面が変わるごとに担任に話しかけるよう ALT に頼んでおきます。「担任の英語の練習になるので (本当です)」と言えば、気のいい相手なら承知してくれるでしょう。

ALT: The game was fun. Class, good job! Sato-sensei, do you think so?

HRT: Yes, good job.

ALT: 〈忘れたふりをしながら〉 Next, what are we going to do? Shall I read a book?

HRT: No, no. Let's sing.

ALT: Oh, yes. Which song?

HRT: "The Rainbow Song".

ALT: Oh, "The Rainbow Song"! We practiced it last week.

HRT: Yes. "The Rainbow Song".

ALT との対話は、担任が英語を使っている様子を見せることに意義があります。上の対話では、担任はほとんど語や句だけの発音ですが、それで十分です。これなら英語の苦手な教員もすぐ実践できます。一方、学級担任や ALT がキーワードを繰り返してくれるので、児童は自分の理解に自信を持つことができます。

6.2 生きたコミュニケーションの発信者になる

上に書いたような発言を増やしていくことに慣れてきたら、次に、ALT や児童に質問をして、一方的な指示を与えるだけの場面から、自分の考えなどを挟んだりして、対話らしい場面へと豊かに発展させていきます。

ALT: What's next, Saito-sensei?

HRT: Cards! What are they, John? 〈カードを見せながら〉

ALT: Food cards! I like chocolate. Class, what food do you like?

Students: 〈あれこれ出るので ALT と共に彼らの発言を汲み上げます〉

ALT: OK. Let's look at the cards. Let's repeat. Onion, carrot, ...
 Students: Onion, carrot, ...

6.3 ティーム・ティーチングの効果

このような参加を通してALTとの信頼関係を築くことができれば、共同運営の授業への展望が開けるでしょう。学級担任が英語を用いて授業に関わることで、児童の意識が変わります。児童と同じ非母語話者である学級担任が英語の使い方のモデルを示すことで、英語は声を揃えてリピートするだけのものではなく、使って対話ができる道具なのだということを児童に印象づけられるのです。

7 文化交流を中心とした活動

外国語活動と総合的な学習の時間を連携させ、国際理解教育として異なる文化を持つ人たちとの交流行事が各地で実践されています。近隣に住む外国人を招いた行事を外国語活動のゴールの一つに位置づけることができます。

7.1 ゲストの出身地の話を聞く

これは、外国語活動の一環として、クラス単位で行うことも可能です。以下の六つの事項に注意しましょう。

- (1) 出身地がどこであれ、英語で話せる人をゲストに選ぶ
- (2) 児童にはゲストの出身地について図書館などで下調べをさせておく
- (3) 挨拶だけはゲストの第一言語でできるように教えてもらう
- (4) できるだけ具体的に、実物、地図、写真、数字を用いて話してもらう
- (5) 教員は生徒の聞いている様子を観察する
- (6) 通訳をしない。児童が理解できない語は短く説明する

7.2 ゲストと日本文化を楽しむ

一緒に折り紙をしたり地域の民謡を踊ったりと、さまざまな活動が可能です。ゲストたちに民謡の振り付けを教えるには、ほとんどことばはいりません。“Turn.”（回って）“Step backward.”（下がって）“Clap hands.”（手を打って）などの表現と動作をTPRで練習しておけば、か

なり使えるようになるものです。体育の専科教員と連携を取り、事前に踊りの練習を英語でしておく、児童は自信を持ってゲストに教えることができるでしょう。

7.3 文化交流フェスティバルを開く

児童を準備と運営に参加させることが重要なポイントです。学んだ英語の成果を示す機会になります。次のような活動が考えられます。

- グループに分かれ、担当する国や地域について下調べさせる
- 学年ごとの外国語活動の経験に応じて役割を分担させる
- ポスターや校内の案内図を英語で作らせる
- 校内の案内のための英語表現を練習させる

このような行事は、児童の英語への動機付けを高めるものです。英語圏だけでなく、さまざまな文化を持つ非英語圏の人たちとコミュニケーションを取る体験は、国際理解を増進し、英語の国際共用語としての特質を理解するための貴重な機会となります。

ここまで述べてきたさまざまな活動が日常の基礎的な TPR などの延長線にあることが理解できたと思います。雑多な活動が思いつきで並ぶカリキュラムではいけません。



理解チェックのための課題

簡単な英語の歌やゲームを児童になったつもりで試してから、どんな効果が期待できるかを話し合しましょう。指導手順も考えましょう。



応用発展をめざした課題

どのような場面なら教員は日本語を使っても構わないか、どのような場面では日本語を使わないほうがよいのか、具体的な場面をイメージしながら話し合しましょう。

臨界期仮説とは？

英語は小さいうちほどネイティブ・スピーカー並の技能が身に付き、ある時期を過ぎるとその自然な習得能力は失われてしまう、というような説明を聞いたことがあると思います。発達心理学の概念で「臨界期仮説」というもので、学習には最も適した時期があり、それを過ぎると身に付けることが難しくなるという考え方です。

最近ではさまざまな事例研究や考察が進んでいます。発音や声調などの、発話者の意図や感情と関係した言語の音声面をプロソディ (prosody) と呼びますが、これについては臨界期仮説が一定の支持を得ています。音声面に限れば外国語は早期にやるのがよいということになります。

大脳生理学の分野からも臨界期仮説に関する話題が提供されています。人間は思春期のころに脳の左右半球の機能が分かれてくることから、その前後で言語の習得に違いが出るというのです。数学などの抽象概念や論理や言語規則は左脳が分担することが知られていますが、左脳が急に発達するのが思春期ですので、外国語の文法をマスターし論理的な外国語が使えるようになるのは、むしろ、抽象的概念を操作できる11歳ごろ以降の方が適しているという見解が支持を得るようになっていきます。

一方、臨界期について否定的な意見もあります。大人になってからネイティブ・スピーカーと同じように外国語を巧みに操る人も少なくないからと言うのです。しかし、その個人の特別な才能、また環境や学習方法などが関係している可能性もあります。

また、ある日突然に臨界のポイントが来てしまう訳でもないのに、もっと柔軟に幅のあるものとして捉えようとする研究者もいます。ある時期に身に付きやすい外国語の領域があるとしても、ある時に誰もが一気に変化するわけではないので、その研究者たちは「臨界期」ではなく「敏感期」と呼ぶことを提唱しています。単に幼いころに英語を学んでおけばよいというのではなく、その年代に応じた学習方法や指導方法を見つけることが大切だということではないでしょうか。